資　料

新潟県におけるいもち病発生の古い記録について

茂木静夫・吉野嶺一（北陸農業試験場）

S. MOGI and R. YOSHINO : Notes of the old manuscripts on rice blast occurrence in Niigata prefecture

衆知のように昭和51年（1976）の新潟県は，穂いもちが魚沼・上越地方を中心に大発生し，激発圃場で10ａあたり収量がわずか 48kg といった惨状を呈した。筆者らも８月上旬の早生穂揃期以降，穂いもち発生実態の調査に歩くことが多くなり，圃場で防除に努める農家の人とも接する機会が多かった。それらの人の話では，或る人はこの発生は昭和28年以来初めてだと言い，また或る人は昭和９年，或る老婆は大正２年以来だとも言い，現在の農家経営の中心となっている世代の人には初めての経験であるとのことだった。そんなこともあって，新潟県でのいもち病発生の年次変動を調査しようとしたが反当収量の記録はあっても，昭和以前のいもち病発生の記録は見つからず，また，凶作の記録はあってもそれがいもち病によるものかどうかは推定の域を出ないものがほとんどであった。

そのような状態であったが，中頸城郡誌巻４（昭和16年，新潟県中頸城郡教育会）1525ページに次のような歎願書が記録されていて，いもちという言葉が記載されているのをみつけたので紹介する。

乍恐口上書を以御訴訟申上候御事、

一、鈴木八右衛門様御代官所越後國頸城郡上下板倉郷武士郷村々之義悪地面故先年以下免ニ被成下候へ共御年貢米金上納難成田畑質入年季賣買仕漸御皆済仕來申候。取分而申酉戌三ケ年打續き旱損亥子両年ハいもち稲ニ罷成悪作仕候へ共御手宛も不成下百姓以之外草臥申候。去亥年ハ悪作高少々宛御引方被成下候へ共年々御免相御取上ケ百姓困窮仕取持之田畑過半質入仕其代を以御上納勤申候、然ル處去冬より當春迄三拾年以來無之大雪ふり申候故雪消遅れ耕作仕付時分相延申候所あまつさへ三月より永日照ニ而田畑不殘日旱損仕其上六月中旬頃悪風吹田畑猶以日損仕候所ニ又候七月三日より七日迄同十三日より廿三日迄昼夜共ニ大風吹き作も吹枯し申候ニ付國本本御役所へ御訴申上候へハ御手代殿御見分被成坪苅合歩御改相成候へハ累年より過半粃劣其上米ニ仕候得ても　米ニ罷成米生悪敷御年貢米ニ難成何共迷惑ニ奉存候、近年百姓困窮仕候所ニ先年より永日照度々の悪風にて作も不殘吹枯し百姓退轉に及可申と迷惑至極ニ奉存御當地迄御訴訟ニ罷登申候、御慈悲ニ被爲聞取上尚御免相御手宛(被)成下候ハ、永御百姓相勤難有可奉存候、以上

寶永六年丑八月　　越後國頸城郡

上板倉郷
下板倉郷
武士郷

御奉行様

これによると，宝永元年から３年まで（1704～６）は早魃のため，宝永４年・５年（1707～８）の２年間はいもちによる不作が続き，歎願書の宝永６年（1709）は前年からの大雪で消雪が遅れ，早魃のため不作となり，生活が困窮したことを訴えている。伊藤誠哉氏（1938，農及園13巻，2033～2038）によると，わが国においていもち病が文献中に初めてあらわれたのは宝永４年（1707）であって，加賀国住人土屋又三郎氏著の耕稼春秋であるという。伊藤氏が紹介した耕稼春秋の内容はいもち病の発生生態を述べたものであり，現在のいもち病発生生態ともよく一致している。中頸城郡誌に記載された歎願書は宝永６年で，耕稼春秋より２年遅く，また，いもち病の症状等についても記述がない。

さらに，伊藤氏（1943，稲熱病並に稲熱病文献抄録集，養賢堂，８ページ）が稲熱病の語源について論考した中に，次の記載がある。『然るに玆に驚くべきことは越後にイモチ或はエモチ（加賀も越後もイとエを混用する）といふ語が今日普通に使用されて居ることである。此語

の意味は自然に物について，その物をネバネバ或はグニヤグニヤさせるものを言う。』（原文のまま）とあり，中頸城郡誌にある『亥子両年ハいもち稲ニ罷成悪作仕候へ共御手宛も不成……』のいもちはいもち病を指したものか，上述の意味のネバネバ，グニヤグニヤした有様を一般的に指しているかは明らかでない。しかし，宝永4年（1707）は積雪地方農村経済調査所報告書第8号(1935，東北地方凶作に関する史的調査，1～124ページ）によれば青森，岩手，宮城各県は霖雨・低温・降霜により，山形，福島は大風雨・洪水による凶作年であったことが載せられている。東北地方の凶作，大凶作年次は霖雨・低温・早冷・大風雨といったパターンの場合に多いことから，冷害年であったとみられ，冷害地域に隣り合った越後もその影響をつよく受け，純冷害よりいもち病による被害が著しかったように推察される。従って，中頸城郡誌のいもちはいもち病そのものを指していると考えても良いようである。

以上のことから，実際にいもち病が発生し，大きな被害を与えた具体的記録として，年代からみて，非常に古い記録であると考えられ紹介した。なお，中頸城郡誌には天明3年（1783年）に長野県境の山五十公郷泉村でいもち病およびからけ虫（稈け虫，ニカメイチュウか？）のために大凶作になったという記録も載せられている。

（1977年8月31日受領）